

平成 23 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20890234
 研究課題名（和文） 在日フィリピン人女性の健康向上を目指した
 パートナーシッププログラムの開発
 研究課題名（英文） Developing partnership program
 to promote Filipino women' s health
 研究代表者
 鈴木 良美（SUZUKI YOSHIMI）
 東邦大学・医学部・准教授
 研究者番号：90516147

研究成果の概要（和文）：

Community-Based Participatory Research の手順に基づき、在日フィリピン女性とのパートナーシップにより運営委員会を設立し、在日フィリピン人乳がん早期発見教育プログラムを開発・実施・評価した。プログラム前後の評価から、参加者のマンモグラフィ検診に対する知識や受診への動機が高められたと考えられる。今後はさらに検診未受診者へのアプローチが必要である。パートナーシップの評価の結果、フィリピン文化に配慮しながらプログラムを改善し、運営委員の関係をより強化できたことが確認できた。

研究成果の概要（英文）：

Based on Community-Based Participatory Research, we funded the committee collaborating with Filipino women in Japan. The committee members developed, implemented, and evaluated a breast cancer early detection educational program for Filipino women in Japan. Pre and post evaluations suggested that this program promoted knowledge and motivation in Filipino women to have a mammogram. We need to work on increasing their mammogram rate. According to the partnership evaluation, we were able to improve the program by modifying it to better reflect the Filipino culture and enhance the relationship of committee members.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,340,000	402,000	1,742,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,540,000	762,000	3,302,000

研究分野：地域看護学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：看護学、在日外国人、フィリピン人、パートナーシップ、参加型研究

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降に日本国に入学・定住した多数の東南アジアや南米出身の在日外国人女性が中年期をむかえつつある。中でもフィリピン人は、日本人男性と結婚し定住する中年期女性が多い。中年期の外国人女性は乳がんなど健康上のニーズをもち、保健医療の現場においても対応を求められている。しかし、彼女たちに焦点を当てた研究はほとんどみあたらないのが現状である。

また1990年代以降、米国の公衆衛生学の分野では、コミュニティの人々の健康向上のために、研究者とコミュニティの人々とのパートナーシップによりおこなわれ、参加者やコミュニティのエンパワメントをもたらす **Community-Based Participatory Research** (以下、**CBPR** と呼ぶ) に注目が集まっている。在日外国人を対象とした従来の研究は、彼らのエンパワメントの必要性は提言されているものの、パートナーシップによる研究は少ない。そこで本研究では、外国人のニーズにみあい外国人が力をつけられる方策である **CBPR** に基づく研究をおこなうこととした。

2. 研究の目的

中年期以降の在日外国人女性の健康向上を目指し、35歳以降の在日フィリピン人女性を一例とし、彼女達の文化・社会的背景を踏まえた上で、研究者と住民とのパートナーシップによる研究手法である **CBPR** による健康増進プログラムを開発・実施・評価する。

3. 研究の方法

(1) 研究の手順

研究は、**CBPR** の先行研究をレビューした結果に基づき抽出した手順を参考に、運営委員会を設立し、運営委員会での話し合いにより健康問題を特定し、プログラムを開発・実施・評価した。具体的なプログラムの開発・実施・評価の内容は研究成果で述べる。

(2) パートナーシップの評価方法

CBPR においては、パートナーシップをどのように評価していくかが課題の一つとなっている。そこで、「地域保健活動におけるパートナーシップ」の概念分析結果をもとにパートナーシップの準備・実施・結果に関する17項目のチェックリストを開発した。チェックリストの項目には、例えば、「パートナーを信頼し対等な関係を築いているか」などを含んでいる。このチェックリストを用いて、運営委員会でパートナーシップの中間・最終評価を実施した。

4. 研究成果

(1) 運営委員会の設立と運営

在日フィリピン人 NGO とのパートナーシップにより運営委員会を設立し、35歳以上の在日フィリピン人女性の健康に関するプログラム内容を協議した。

(2) 健康課題の特定

運営委員会での協議の結果、健康課題として乳がんを焦点を当てることになった。乳がんを焦点をあてた理由としては、第1に、在日フィリピン人女性の乳がんによる死亡数が、1997年から2001年までの5年間では5人であったものが、2002年から2006年には31人と急増していることがあげられる。第2に、在日フィリピン人コミュニティの中で、仲間が乳がんを罹患したり乳がんによって亡くなったことにより、乳がんへの関心や不安が高まりつつあったことである。そして第3には、これまでに在日外国人の乳がんに関する罹患率や、検診受診率などに関する統計的データや文献はみあたらず、その実状を明らかにし彼女達の文化に見合う方策を検討する必要があると考えたことがあげられる。

(3) 在日フィリピン人乳がん早期発見教育

プログラムの開発

① プログラムの開発

運営委員会の意見や文献レビュー、乳がん専門家の意見をもとに、在日フィリピン人女性を対象とした乳がん早期発見教育プログラムを開発した。プログラムには、乳がんを体験したフィリピン人講師による乳がんや検診に関する講義と体験談、参加者全員によるディスカッション、プログラム前後のタガログ語版（もしくは英語版）質問紙調査を含んでいる。フィリピン人講師には、事前に研究者から乳がんに関する研修を行った。講義や資料は、基本的にタガログ語を使用した。また、フィリピン人の場合、日本語が読めないために自治体が提供する乳がん検診や、乳がん検診を実施している医療機関の情報を知らない人もいるため、これらについても情報提供した。また、フィリピン人を対象としたプログラムでは、予定していた時刻より30分から1時間程度遅れる参加者が多く、参加申し込みをしても当日は欠席する人も多い傾向にある。そこで、文化に即した運営方法として、開始前に昼食会を行ったり、あらかじめ開始時間を1時間早く知らせるなどの工夫をした。

② 質問紙の作成

在日フィリピン人を対象とした乳がんや検診への知識と認識に関する質問紙は、フィリピン系米国人を対象に Wu ら(2007)が開発した質問紙や、文献レビュー、対象者からの

聞き取りをもとに作成した。スケールには、「乳がんの知識」、「マンモグラフィの知識」、「乳がん発病リスクの認識」、「マンモグラフィ受診へのセルフエフィカシー」、「マンモグラフィ受診への利益の認識」、「マンモグラフィ受診への障壁の認識」の6種類を含んでいる。この質問紙は、タガログ語、英語、日本語でバックトランスレーションをおこなった上で作成した。

③倫理的配慮

倫理的配慮として、質問紙は無記名自記式とし、回答を依頼する前に口頭および文章で本人に説明した。回答箱への回収をもって同意とみなした。なお、本プログラムは、東邦大学医学部研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

④運営委員会での協議

CBPRでは、異なる立場の人々が参加しているため、常に委員間の意見の相違が生じる。本研究においても、研究者は、はじめに対象のニーズを把握するための調査を希望した。しかしフィリピン人運営委員は、参加者に役立つプログラムの提供を求めた。フィリピン人運営委員によると、在日フィリピン人は、これまでも研究対象としてアンケート調査などに協力したものの、その成果を実感することは少なく、研究に対して否定的な感情を持っているとのことであった。そのため、在日フィリピン人に対して調査を行う際には、フィリピン人が何かを得られた実感を持てるよう、健康情報を提供するなどの配慮が必要となる。そこで、CBPRの原則に基づき運営委員間で話し合いを重ね、当事者の意見を尊重しながら、現実可能な方策を探った。その結果、まずは試行的なプログラムをおこない、その中で参加者の意見を収集し、そこで得られたデータをもとにプログラム内容を検討し、以下のプログラムを実施した。

(4)プログラムの実施

在日フィリピン人乳がん早期発見教育プログラムを国内5カ所（埼玉県2カ所、東京都、長野県、愛知県、各1カ所）で実施し、29～65歳までの計45名の参加者を得た。フィリピン人女性は、オープンなディスカッションに長けており、講義中も積極的に質問したり、自分の意見を述べ、活発に意見交換が行われた。

(5)プログラムの評価

参加者のうち40歳以上で乳房疾患がなく、前後とも質問紙に回答の得られた20名について、乳がん検診の知識や認識の変化を評価した。

対象の属性について述べる。平均年齢は

47.4±5.2年、平均在日期間は16.8±7.4年、マンモグラフィ受診経験のある人は4名(20%)、健康保険加入者が14名(70%)、出産経験のある人が17名(85%)であった。日本語の読み書きは漢字の読み書きできる人は1名(5%)、ひらがなのみ読み書きできる人が17名(85%)、できない人が1名(5%)、無回答1名(5%)であった。

プログラム前後でスケールを比較したところ、6種類のスケールのうち、プログラム後に有意に高くなっていたのは「マンモグラフィの知識」と「マンモグラフィ受診へのセルフエフィカシー」、「乳がん発病リスクの認識」であった(P<0.05)。この結果から、本プログラムはマンモグラフィの知識や受診への動機を高めたと考えられる。

また上記対象者のうち、マンモグラフィ検診経験者は20%であった。他方で、Wuら(2007)のフィリピン系米国人を対象とした研究では、マンモグラフィ受診経験者は60%を超えていた。両国の受診率の差には、日本のマンモグラフィ受診率の低さ、日米のフィリピン人の背景や保健システムの違いなどが影響していると考えられるものの、在日フィリピン人の受診率向上へのアプローチが必要であると考えられる。

(6)パートナーシップの評価

準備の評価、実施の評価、結果の評価に分け、運営委員会による中間・最終評価で得られた結果を述べる。

準備の評価では、活動のエビデンスとなるデータが不足していることがわかった。今後はプログラム参加者を増やし、プログラムの質問紙の信頼性・妥当性を検証していくなどエビデンスに基づくデータを蓄積する必要がある。

実施の評価では、運営委員同士の良好な関係を構築できていることがわかった。前述したようにプログラムの運営に際しては、フィリピン人運営委員と研究者の意見が対立したものの、互いに根気よく討議を続け、当事者の意見を尊重しながらプログラム運営方法を決定したことで、両者の関係を強化できた。ただし、プログラム運営の検討は研究者とフィリピン人NGOリーダーの2人のみで行うことが多く、今後は運営委員会のあり方を検討していく必要があることがわかった。

結果の評価では、個人やパートナー同士の学び合いや成長を確認でき、さらにコミュニティの人たちのニーズに見合うプログラムを実施できたと考えられるものの、コミュニティの健康指標改善の評価は、今後の課題であることが明らかになった。

このチェックリストを用いたことにより、これまで感覚的にとらえていたパートナーシップの成果を意識的に評価することが可

能となった。さらに、プログラムの成果を運営委員で共有できる機会ともなり、関係強化に役立てることができた。

(7)今後の方向性

今後も引き続き、同プログラムを全国で開催し、参加者数を増やすとともに、プログラム参加者へのマンモグラフィ受診に関して追証予定である。

引用文献)

Wu TY, West BT, 2007, Mammography stage of adoption and decision balance among Asian Indian and Filipino American, Cancer Nursing, 30(5), 390-398.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ①鈴木良美、フィリピン人女性の乳がん検診の促進・阻害要因に関する統合的文献レビュー、東邦看護学会、平成22年12月19日、東京都、品川区
- ②鈴木良美、トランスセオレティカル・モデルによる在日フィリピン人女性のマンモグラフィ受診のステージ、国際保健医療学会、平成22年9月11日、福岡県、宗像市
- ③鈴木良美、地域保健活動におけるパートナーシップ評価チェックリストの開発と評価の試み、日本公衆衛生学会、平成21年10月22日、奈良県、奈良市

[図書] (計1件)

- ①鈴木良美、医歯薬出版、地域保健に活かすCBPR:コミュニティ参加型の活動・実践・パートナーシップ、2009、CBPRのパートナーシップ、p52-57

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 良美 (SUZUKI YOSHIMI)
東邦大学・医学部・准教授
研究者番号: 90516147

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者

該当者なし